

令和6年度 学校自己評価計画の最終報告書

石川県立金沢西高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度 判断基準	集計結果 ()内は前期	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 GIGAスクール構想の充実に向け、ICTの効果的な活用を通じ、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善に努め、生徒の主体的な学びおよび確かな学力の育成を図り、進路実現につなげる。	① ICTの効果的な活用とともに、研究授業、相互参観授業を通して授業改善を図り、探究的な学習活動や質の高いグループ活動を取り入れた授業を実施する。	教務課	「効果的なICTの活用など工夫された授業が行われている」の項目においてA評価が A 65%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満 「授業を通じて学力がきている」という肯定的評価が A 88%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	生徒による後期授業評価アンケートで A評価 57.3% (55%) →評価【C】(C) 生徒による後期授業評価アンケートで 肯定的評価 82.6% (83%) →評価【B】(B)	授業において生徒がChromebookを利用する場面は確実に増えている。Chromebookの利用は定着しているため、来年度は、さらに効果的なChromebookの活用を目指し、教員間で情報交換を活発にしていきたい。 各教科が主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善に取り組んでいる。今後もこの取り組みを発展させていくとともに知識を関連付けて深く思考させたり、解決策を考えさせたりするなど、探究的な学習活動を取り入れた授業を展開し、確かな学力の育成を図りたい。
	② 「総合的な探究の時間(西高プロジェクト)」の活動を通して、主体的・探究的・協働的に学び活動する態度を養う。	進路指導課	生徒アンケートで「主体的・探究的・協働的に取り組んだ」とする肯定的評価が A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	アンケート実施できず。	昨年と探究内容を変化させながら、社会状況や進路状況も踏まえて実施することができた。生徒の実態や社会の変化を敏感に感じ取りながら、必要な力を身に付けさせていきたい。
	③ 家庭学習時間量調査を実施して現状を把握・分析し、指導することで進路実現に向けた学習時間の確保を促す。	教務課	家庭学習時間が「学年+1時間」に達している生徒の割合が A 60%以上 B 40%以上 C 20%以上 D 20%未満	家庭学習時間調査で家庭学習時間が「学年+1時間」に達している生徒の割合 1年 63.3% 評価【A】 2年 23.3% 評価【C】 3年 21.0% 評価【C】 全体 39.7% 評価【C】	家庭学習時間が「学年+1時間」に達している生徒の割合は昨年度と比較して減少した。生徒が自発的に取り組み、探究的な学びを深められるように課題の在り方や提示の仕方を工夫していきたい。また、次年度の進路目標を明確にさせ、内発的な動機付けを行うことで、家庭学習のさらなる充実を図ってきたい。
	④ 校外模試のデータを教科と学年が連携をとって分析し、方策を検討することで、学力向上に結び付ける。	進路指導課 1・2学年	1,2年1月の校外模試3教科型偏差値52以上の生徒の受験者全体に対する割合が A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満 ※1・2年別に達成度を判断する	1,2年1月の校外模試3教科型偏差値52以上の生徒 1年 126名・ 35.3% →評価【C】 2年 102名・ 29.3% →評価【D】	結果は1年生の評価がC、2年生の評価がDである。9クラスになったことにより、偏差値40付近が増えている。きめ細かい進路指導により、偏差値50弱の生徒を50以上にし、上位層のさらなる高みを目指す指導をしていきたい。
	⑤ 進路学習・探究活動を充実させることで、高い進路目標を持たせ、最後まで目標実現のため努力を継続させる指導を行う。	進路指導課	10月の校外記述模試及び、11月の共通テスト模試総合偏差値平均偏差値50以上の生徒の受験者全体に対する割合が A 30%以上 B 25%以上 C 15%以上 D 15%未満 11月の共通テスト模試総合偏差値平均偏差値52以上の生徒の受験者全体に対する割合が A 30%以上 B 25%以上 C 15%以上 D 15%未満	3年10月の校外記述模試平均偏差値50以上(国数英文系+数英理系)の生徒 47名・ 20.2% →評価【C】 3年11月の共通テスト模試総合偏差値52以上(6-9文系+6-8理系)の生徒 38名・ 13.7% →評価【D】	3年生の結果は10月模試【C】11月模試【D】である。人数的には昨年度並みではあるが、教育課程が新課程であることや、9クラスとなり全体の人数が増えたことなども原因と考えられ苦戦している。現3年生は国語、数学、英語の3教科の成績が2年次より安定しておらず、その結果、1年間を通して国数英の学習の定着ができず、他教科に時間をさけなかった。次年度では3年生になる前の学習に十分に意識させ、早めの受験勉強を促すことで、夏までに国語、数学、英語の3教科の成績を伸ばすことに重点を置きたい。
学校関係者評価委員会の評価	今の高校生は、勉強そのものに積極的でない場合が多いように感じる。言われたことはこなすものの、自分から進んで学びたいという気持ちが少し足りないのではないかと。生徒との対話を通じて、もっと自分の学習に対する意識を高めていけると良い。高校の3年間は目標ばかりを先に掲げがちだが、その過程や現実をしっかり理解することも大切だと感じる。目標を設定するだけでなく、その目標を達成するための具体的なステップを考えることが、より実現可能にするための鍵だと思う。そんなサポートをしていただけると嬉しい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	面談強化週間を設け、教師が生徒と定期的に面談を行うことで、生徒が自分の進路や目標について考える力を養う。面談を通じて個別のアドバイスを行い、生徒が自ら計画を立て、その達成に必要な具体的なステップを考える力を育成する。また、キャリア教育を充実させ、将来に対する意識を高める取り組みを強化する。				
2 組織的な教育活動を通して、生徒の規範意識を高め、将来の主権者としての自覚を促し、自立した社会人たる判断力・行動力を養う。	① 挨拶運動を通して生徒会執行部と協力し合い、学校全体の活性化を図る。自ら発する伝わる挨拶を実践し、社会人として必要なコミュニケーション能力を養う。	生徒課	生徒アンケートから、「積極的に挨拶を行った」が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	生徒による後期学校評価アンケートで 肯定的評価 85% (85%) →評価【C】(C)	自ら進んで挨拶できる生徒が年々減少してきている。人間関係や他とのコミュニケーションが希薄化してきていると感じる。人との関りが大切な行動であることを意識させていきたい。
	② 様々な交通安全指導から、自転車乗車マナーの向上を意識し、交通社会の一員としてルールの遵守、安全への配慮等、事故防止に向けた注意力、判断力を身に付けさせる。	生徒課	自転車乗車違反件数が、年度末累計で、 A 10件未満 B 20件以下 C 30件以下 D 31件以上	石川県警察本部交通違反指導状況データより 4~11月集計(4~6月集計) 149件 (80件) →評価【D】(D)	11月末時点で149件とここ数年で一番多い指導件数である。金沢西警察署と連携して交通安全の意識とルール遵守の精神の醸成の為、積極的な取り組みをお願いしたことにより数が増えたと考える。規範意識の向上心高め、交通社会の一員である更なる自覚を強く促す指導が必要である。
	③ いじめは絶対に許されない行為であることを周知し、他者の心情を配慮できる思いやりの心を醸成する。また、未然防止に取り組みながら、居心地の良い学校づくりに努めていく。	生徒課	「互いを尊重できる居心地の良い学校であるか」のアンケートから、肯定的評価が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	生徒による後期学校評価アンケートで 肯定的評価 93% (93%) →評価【B】(B)	今年度はいじめ案件としての認知が3件あり経過観察中である。引き続きいじめ認知のアンテナを高くし、いじめは認められないという意識を強く醸成させていきたい。

	④	自己管理能力を高めるために、自らの健康問題にしっかりと向き合う態度を養う。	保健相談課 各学年	歯科の受診率が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	1月末現在 歯科受診率 45.3% →評価【D】	むし歯の受診率は80%を超えているが、要観察歯の受診率が低い。集団と個別の保健指導を行い歯科受診の重要性をより周知させていきたい。	
学校関係者評価委員会の評価			中学校では挨拶運動などを行い、生徒はよく挨拶をするが、高校生になると挨拶が減る。部活動から挨拶の指導をすればよいのではないかと。コロナ禍以降、大人でも挨拶をしない人が増えており、挨拶に対する意識が変化しているのかもしれない。挨拶は家庭の指導でもあり、大切なコミュニケーションである。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			ホームルームや部活動などを通じて規範意識の向上を図り、挨拶の重要性を伝える。これにより、生徒同士の自然なコミュニケーションを促進し、社会性を育む機会を提供する。				
3	①	文武両道の実践のもと、部活動の効率的な活動と更なる活性化を図り、心身の錬磨を通して、人間力を高めチャレンジ精神を培う。	生徒課	「充実感や達成感を得られる部活動が行えているか」の肯定的評価が A 85%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	生徒による後期学校評価アンケートで肯定的評価 91% (92%) →評価【A】(A)	部活動での充実感や達成感を得られたという数値が90%を超えているが、自己評価の甘さも感じられる。部活動への情熱が近年薄くなりつつあり生徒諸君が部活動に求めているものも変わってきているように感じる。生徒会執行部と会話を深め何が必要か議論したい。	
		②	運動部・文化部ともに計画的かつ効率のよい練習を行い、好成績につなげる。	生徒課	(運動部) 県高校総体総合成績が A 10位以内 B 20位以内 C 30位以内 D 31位以下 (文化部) 各種大会・コンクールにおける年間の獲得賞状枚数が A 30枚以上 B 20枚以上 C 10枚以上 D 10枚未満	年度末の実績で評価 (運動部) 県高校総体総合成績 総合 19位 (R5年度:19位) →評価【B】(B) (文化部) 年間の獲得賞状枚数 21枚 (R5年度:28枚) →評価【B】(B)	今年度も県高校総体総合成績が昨年度と同じ19位であり、何とか20位以内を確保できたことができた。次年度もこれ以上の成績を維持したいと考える。文化部の表彰はやや減り21枚の賞状獲得となったが、個人種目として活躍できる生徒が減ったことがこの結果となった。もっとやりたいという生徒について、支援や指導が行き届けばもっと結果に反映できると思う。
学校関係者評価委員会の評価			部活動を強化している学校に勝つのは難しいと思うが、勝つと学校が活性化する。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			部活動指導員などの外部指導者の活用を推進するとともに、効率的で効果的な練習方法を常に探究し、生徒が充実感や達成感を得られるよう努める。				
4	①	ボランティア等の諸活動や情報の発信を通して、保護者、地域との連携を密にし、信頼され支援される学校づくりを行う。	教務課 総務課 各学年	「学校の情報提供は十分に行われている」という保護者が A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満 教育ウィーク、進路説明会等での保護者の来校のべ人数が A 800名以上 B 600名以上 C 400名以上 D 400名未満	保護者による後期学校評価アンケートで肯定的評価 87% (88%) →評価【C】(C) 保護者の来校のべ人数 979名 (R5年度:889名) →評価【A】(A)	教育活動の内容をHP、学年通信、メール配信等により情報提供した結果、高い評価をいただいている。しかし、悪天候時の登校対応については、連絡が遅い、学年通信発行スケジュールを定期的にしてほしいという意見もあった。 新型コロナウイルスが5類に移行したことで、保護者等、外部の方の来校が増えた。特に秋の西高祭では来校制限がなくなり、多数の保護者が来校された。	
		②	主体的な学習の基盤となる豊かな知識と思考力・判断力を身につけるため、各分掌や学年、教科と連携し、生徒の読書活動を促進する。	総務課	図書館の貸出冊数生徒1人あたり1月末までで A 4冊以上 B 3冊以上 C 2冊以上 D 2冊未満	4～1月集計 1,96冊 (R5年度:1,6冊) →評価【D】	授業で図書室を利用する機会が減っており、図書室が身近な存在ではなくなってきつつある。クロムブックで蔵書検索ができるようにしたので、来年度の貸し出し増を期待したい。
		③	学年・委員会・部活動による地域貢献や学校行事のサポートを行い、ボランティアへの関心を高める。	生徒課	ボランティア活動に参加した学年・委員・部活動の人数が A 150人以上 B 100人以上 C 50人以上 D 50人未満	金沢マラソンボランティア参加人数 95名 →評価【C】	部活動やボランティア委員に加えて、全校生徒に声をかけ、参加しやすいようにGoogle Formで募集をした。地域社会への貢献やボランティア活動への関心を向上させたい。
学校関係者評価委員会の評価			一般の図書館に行くと新しい本が随時入ってくる。また、スマホなどでもすぐに本が読めるため、図書館の貸出冊数が減っていると考えられる。時間を有効に活用するために、スマホで読み上げ機能を使っている。タイムパフォーマンスは大切である。図書館を自習室として活用すれば、ついでに貸出冊数も増えるのではないかと。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			図書館の蔵書検索が各生徒のクロムブックからも利用できることを周知し、それにより図書館の利用者の増加につなげたい。				
5	①	「教職員の多忙化改善に向けた取組方針」を踏まえ、業務の平準化と見直し・精査・最善を通じ教職員の時間外勤務縮減を推進し、ワークライフバランスを意識した業務改善につながる学校マネジメントを推進していく。	教頭	具体的な取組を実施し、時間外勤務が減少した教職員の割合が A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	教職員による後期学校評価アンケートで肯定的評価 69.8% (64%) →評価【B】(B)	教職員自身が多忙化を改善しようという心がけを行い、自ら勤務時間を適切に管理したことにより少しずつであるが前進している。定期試験期間の生徒の下校時刻を早め年休を取りやすい環境が作れたこと、部活動外部指導員の採用、定時退庁日のお知らせを定期的に行ったことが良かった。さらに向上させるため積極的に導入した自動採点システムの積極的な活用も定着してきている。更なる策を講じたい。	
		②	定時退庁日等の設定や会議の効率化を図り、タイムマネジメントの意識を高める。また、ワークライフバランスを常に意識し、具体的な取組を実践する。				
学校関係者評価委員会の評価			教職員自身の自己犠牲は避けてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			教職員の多忙化改善に対する意識は高まっており、さらにそのための環境を整えたい。				